

2023

8.2 (水)

12:10
12:50

12:10-12:15

◆ 演者紹介

12:15-12:40

◆ プレゼン

12:40-12:50

◆ 質疑応答

オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://temdec-med-kyushu-u-ac-jp.zoom.us/webinar/register/WN_8rmbdSiwRdCvg6c3QHCWrw

【技術支援】九州大学 Q-AOS & TEMDEC

国際農学教育プログラム： COIL+ について

~Learning and thinking about SDGs~

司会：横田 文彦 准教授 (Q-AOS 研究推進コーディネーター)



Key Words

国際農学教育

SDGs

現場実習

COIL

房 賢貞 助教

九州大学 農学研究院 附属国際農業教育・研究推進センター

私は韓国で生まれ、過去 20 年間日本に住んでいます。日本での生活はすべて九州大学で過ごしました。学部 4 年生の 2001 年、九州大学に交換留学生としての留学がきっかけで、日本で勉強を続けていきたいと思うようになりました。2003 年 10 月、農学研究科の修士課程に進み、2008 年 9 月、農学博士号を取得しました。農林水産省のプロジェクト研究員として、社会問題の解決を目的とした産学連携プロジェクトに携わり、2012 年 4 月より、女性研究者キャリア開発センターの研究員として勤務しました。2014 年 2 月から 2018 年 3 月まで、大学のリサーチアドミニストレーター (URA) として勤務し、研究プロジェクトの立案・提案、実行、運営をサポートしました。この間、農学系の研究開発プロジェクトをいくつか担当し、特に農産物の輸出促進に関するプロジェクトは URA としての最後のプロジェクトとなりましたが、このプロジェクトは研究プロジェクトとして今も継続しています。2018 年 4 月より、農学部の留学生の指導、教育プログラムの開発、進路指導やサポートなどを担当しています。

基礎研究から応用研究まで、生物学から化学、工学、経済学まで幅広い研究分野を含んでいるのが九州大学の農学分野です。まるで分野全体が、ミニ総合大学と言えるでしょう。私は、その農学研究院で「課題を見つけて、その解決に向けて実践する。」ことを仕事としています。

本日のセミナーでは、二つの主要なプロジェクトについてご紹介させていただきます。前半は、国際農学教育プログラム:COIL+ (COIL 型授業+現地実習) について、後半では、農林水産物の輸出に関する研究開発プロジェクトの活動についてご紹介できればと思います。

2023

8.9 (水)

12:10
12:50

12:10-12:15

◆ 演者紹介

12:15-12:40

◆ プレゼン

12:40-12:50

◆ 質疑応答

オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://temdec-med-kyushu-u-ac-jp.zoom.us/webinar/register/WN_22DIYqoITOWsgS7w6pr_1w

【技術支援】九州大学 Q-AOS & TEMDEC

タンデム学習による外国語学習 ～学習者同士の自律的な言語学習の効果と課題～

司会：田中 俊徳 准教授 (Q-AOS 研究推進コーディネーター)



Key Words

タンデム学習

E タンデム

学習者オートノミー

相互学習

協働学習

多文化共生

脇坂 真彩子 准教授

留学生センター



兵庫県出身。2008 年にお茶の水女子大学文教育学部を卒業。大阪大学文学研究科で日本語教育学を専攻し、2014 年に博士号（文学）を取得。その後、同年 9 月に九州大学留学生センターに講師として着任し、2020 年 10 月より現職。

現在、九州大学の学部留学生のための日本語コース (Japanese Language Courses : JACs) のコーディネーターを務め、外国人留学生への日本語・日本文化の教育と研究に取り組んでいます。また、2008 年より日本の大学キャンパス内での対面式タンデム学習と、日本ドイツ間での E タンデムの実践・研究を行なっています。

タンデム学習とは異なる言語を母語とする 2 人がパートナーとなり、互惠性と学習者オートノミーを原則として、互いの得意な言語や文化を学び合う学習のことです。もとは 1960 年代後半にドイツとフランスで行われたものですが、その後、欧州統合に伴う言語政策や当時主流だった言語学習法・教授法の影響を受けながら発展し、1990 年代頃から様々な国に広がり、外国語学習に幅広く活用されるようになってきています。

本セミナーでは、タンデム学習とはどのようなものかを紹介した上で、その学びの効果と課題についてお話しします。今後、日本社会では多文化共生の推進がますます重要になっていくと思われる。本発表を通して、様々な教育現場におけるタンデム学習の今後の可能性について皆さんと考えたいと思います。

2023

8.23 (水) 12:10
12:50

12:10-12:15

◆ 演者紹介

12:15-12:40

◆ プレゼン

12:40-12:50

◆ 質疑応答

オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://temdec-med-kyushu-u-ac-jp.zoom.us/webinar/register/WN_NlndQdh8S2KSAalwba1gbQ

【技術支援】九州大学 Q-AOS & TEMDEC

今さら聞けないパリ協定とは？ —世界のカーボンニュートラルについて考える—

司会：田中 俊徳 准教授 (Q-AOS 研究推進コーディネーター)

7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに11 住み続けられる
まちづくりを13 気候変動に
具体的な対策を

Key Words

気候変動

パリ協定

温室効果ガス排出量

早濑 百合子 准教授

九州大学 グローバルイノベーションセンター

京都大学大学院エネルギー科学研究科博士課程修了し、京都大学エネルギー理工学研究所、国立環境研究所を経て、2013年より現職の九州大学グローバルイノベーションセンター(旧：産学連携センター)に着任しました。国連気候変動枠組条約、パリ協定の下での排出量審査官をしております。日本国の京都議定書温室効果ガス排出量の算定に従事し、国連気候変動枠組条約締約国会合(COP)での交渉経験を持ち、温室効果ガス排出量算定方法論、環境政策評価、環境教育を専門としております。

2015年にフランスのパリで開催された国連気候変動枠組条約締約国会議(COP21)でパリ協定は採択されました。パリ協定の実施には気候変動対策の大幅な強化や低炭素ソリューション、そして新たな市場が必要です。

このセミナーでは、京都議定書から後継のパリ協定へと移行し、世界の脱炭素、カーボンニュートラル目標への取り組みにどのような影響を与えたのか、世界の温室効果ガス排出量における枠組みについて議論します。

2023

8.30 (水) 12:10
12:50

12:10-12:15

◆ 演者紹介

12:15-12:40

◆ プレゼン

12:40-12:50

◆ 質疑応答

オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://temdec-med-kyushu-u-ac-jp.zoom.us/webinar/register/WN_CgwlpfIMR3etboMMSXL7JQ

【技術支援】九州大学 Q-AOS & TEMDEC

世界を規定する：

マインドフルネスからインターメディア・ポエトリーまでの認知科学

司会：横田 文彦 准教授 (Q-AOS 研究推進コーディネーター)

3 すべての人に
健康と福祉を4 質の高い教育を
みんなに8 働きがいも
経済成長も

クロンツ シャルレーヌ 准教授

人文科学研究院 文学部門 仏文学

クロンツ・シャルレーヌ先生はフランス南部出身で九州大学・人文科学研究院の准教授（博士）です。2008年までフランス南部に在住。ポー大学の研究員を経てパリに移り、パリ・パンテオン・ソルボンヌ大学、パリ・エスト・クレティユ大学、フランス教育省などで10年間勤務しました。2018年に、日本の九州大学に着任しました。主な研究テーマは、フランスとフランス語圏の詩（20世紀と21世紀）における形式としての詩学、相互媒介性、パフォーマンス、空間と媒介、詩と芸術の関係です。最近、フランス語圏の詩人ゲラシム・リュカについての本を出版しており（Gherasim Luca: Texte, Image, Son, Oxford/Bern, Peter Lang, 2020）、折り紙に関するジル・ドゥルーズの哲学的思想を更新する共同出版物を編集しました（Origami, le pli dans les littératures et les arts, special issue of Pau University's Op.）。また、いくつかの国際研究プロジェクトを推進しています。特にAVANTGARDESプロジェクト（2016-2020ケンブリッジ大学・トリニティ・カレッジ / ポー大学など）、ANR LECプロジェクト（2011-2015ポー大学 / ケンブリッジ大学・トリニティ・カレッジ / パリ・ソルボンヌヌーベル大学など）に参加しています。人生と研究を連続的かつ全体的な視点から捉えていると取り組んでいます。

ここ数十年間の認知科学を通じて、私はマインドフルネス（心の健康）・ウェルネス（体の健康）とインターメディア・ポエトリー（視覚的・演劇的要素を入れた詩）には、心身に関する共通点があることを確認することができました。マインドフルネス・ライフスタイルを実践している人は、没入状態に達し、自分の核となる幸福とより深くつながることができます。個人的であると同時に集団的であるこの経験は、ウェルネスと外界（他者、環境）との循環的な関係を生み出すが、そういった関係はしばしば美学（音、言葉、イメージ）にもつながります。インターメディア・ポエトリーもマインドフルネスも世界を規定する。つまり、具現化された認知は世界を単に表象するのではなく（最初のA.I.システム、デカルト思想、文学理論...）、世界を変容させたり、変容されたりします。これは、外部と内部の世界が一つになる現象学的力学により近いと言えるでしょう。ゲラシム・ルカのフランス語圏の作品を例に、インターメディア・ポエトリー詩が、相互作用と変容を可能にする多感覚的な体験（舞台、映画、ラジオ、彫刻...）をどのように生み出すかについて、説明していきたいです。